

< 2017年 1月 >

古賀 順子

サン・シュルピス寺院とドラクロワ

パリ 6 区にあるサン・シュルピス寺院内に、「聖天使の礼拝堂(Chapelle de Saints Anges)」があります。祭壇に向かって右側、入口から最初の礼拝堂で、ウジェーヌ・ドラクロワ(1798-1863)が壁画 2 点と天井画を描いています。パリ市が出資し、2015 年 10 月から 2016 年 11 月にかけて修復作業が行われ、表面の汚れを落とし、色が蘇った作品を再び見られるようになりました。

ドラクロワと言えば、現在ルーブル美術館(ドノン館)に所蔵されている「民衆を率いる自由の女神」(1830)が一番有名な作品でしょう。ナポレオン 1 世が失脚し、復古王政期のルイ 18 世(即位期間 1814-1824)の後を継いだ弟シャルル 10 世(1824-1830)が、1830 年 7 月「サン・クルーの勅令」を出して選挙権の縮小を命じたことから、パリ市民が蜂起する「7 月革命」が起こります。フランス革命から続く市民戦争の脅威の中、身の危険を感じたシャルル 10 世は退位し、イギリスに亡命。ブルジョワ市民階級が支持するオルレアン公ルイ・フィリップが、自由主義を掲げた立憲君主として、7 月王政の座に付きます。その 1830 年 7 月 27・28・29 日(「三日間の栄光」)を題材にしたのが「民衆を率いる自由の女神」で、ルイ・フィリップが買上げ、ドラクロワの画家としての地位が確固たるものになります。自由を象徴する半裸の女性は、革命を象徴する赤いフリジアン帽子を被り、青・白・赤の空を背景に、右手に三色旗を掲げ、左手には銃剣を持った、逞しい姿です。右奥にノートルダム寺院の塔が見えるように、パリ市内のバリエードを破って自由を叫ぶ血生臭い場面です。

ドラクロワは、1826 年頃からヴィクトール・ユーゴー(1802-1885)と交友関係を結び、ロマン派を代表する画家として、1833 年には、現在の国会議事堂内「王の間」の大作(天井画と大小 8 点の壁画)を描くなど、7 月王政期に頂点を迎えます。その後、1848 年 2 月革

命によって、フランス初代大統領となるナポレオン 3 世の第二共和制に移行した翌年、サン・シュルピス寺院の制作注文を受けます。しかし、実際に「聖天使の礼拝堂」に取り掛かるのは、ルーヴル美術館(ドノン館)の「アポロンの間」天井画「蛇ピトンを倒すアポロン」(1850-1851)、パリ市庁舎「平和の間」(1852-1854)が終わる 1854 年以降のことでした。1852 年には、ナポレオン 3 世はクーデターによって、第二帝政(1852-1870)として、皇帝の座に付きます。社会が大きく、激しく、変動していく中で、ドラクロワは、病と闘いながら、最後の大作サン・シュルピス寺院の礼拝堂に着手します。

天井画「竜を倒す大天使聖ミカエル」は、「ヨハネの黙示録 12 章 7-12 節 天国での戦争」を題材にしています。これに対し、壁画 2 点は、これまでの宗教画では珍しい場面を選んでいきます。西の壁「ヘリオドロスの神殿からの追放」は「マカバイ記 2・3 章 21-28 節」から、東の壁「ヤコブと天使の格闘」は「創世記 3 章 24-28 節」に即しています。1857 年からは、移動に時間を取られないように、サン・シュルピス寺院に近いフリュスタンベール通りをアトリエ兼住居として、1861 年「聖天使の礼拝堂」が完成するまで、何度も何度も構図やデッサンを練り直しています。フリュスタンベール通りのアトリエは、1920 年からは「ウジェーヌ・ドラクロワ 美術館」となり、2018 年春には、サン・シュルピス寺院の制作に関連した大きな展覧会が予定されています。

「聖天使の礼拝堂」は、1863 年に亡くなるドラクロワ晩年の大作で、彼を最後に、ルネサンス期から続いていた絵画の流れは大きく変わります。ギリシア・ローマ神話の神々、聖書や宗教上の人物や物語、伝説・歴史上の人物、英雄伝など、これまでの絵画や芸術の中心であった題材は、個人へと移っていきます。ギュスターブ・クールベ(1819-1877)の写実絵画によって、新古典派・ロマン派に終止符が打たれ、モネやルノワールを中心に、新たな絵画運動としての印象派が誕生することになります。近代西洋絵画の岐路を象徴する画家として、ドラクロワの「聖天使の礼拝堂」を見直すと、面白い発見があるのではないのでしょうか。